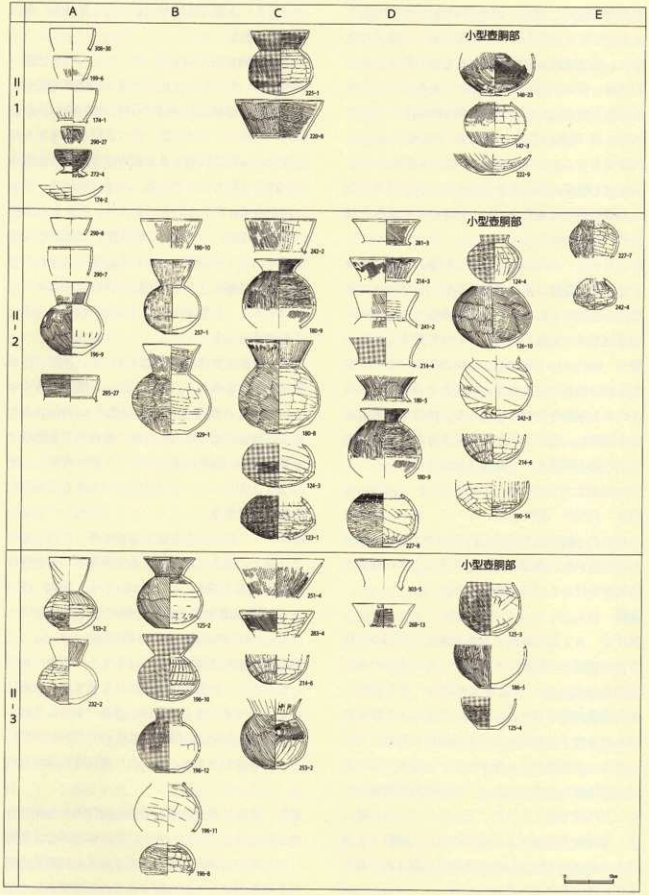
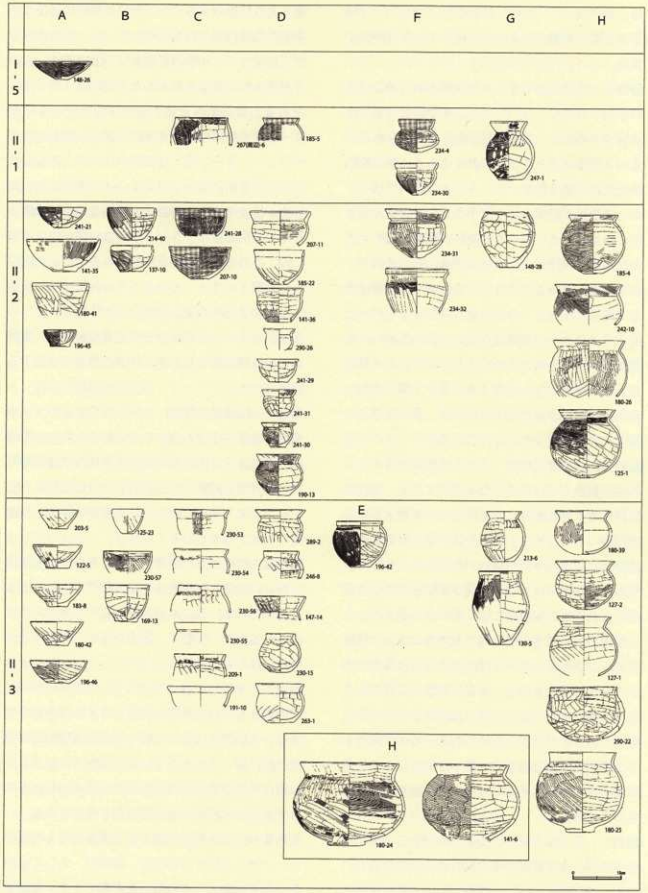


第579図　古墳時代の土器変遷図（7）



第580図　古墳時代の土器変遷図（8）

る。畿内系の「X字」状器台は明瞭でないが、Ⅱ－3期の東海系のものが交代している可能性がある。

器台A　脚部の内彎するA類は東海地方西部のものを強く意識したものである。小型器台の中では少数である。Ⅱ－2期までは多く見受けられるが、Ⅱ－3期にはほとんど見られなくなる。型式論的な変化は、個体数が少なく今ひとつ確実ではないが、器受部が脚部に比して小さく、接合部が細く、高さのある大きく開くものから、器受け部が大きく、接合部の径が太くなり、脚部の高さが低平であまり開かないものになる。全体として脚部に比して器受部が大きくなったように見えるものへと変化する。Ⅱ－1期のものは、器受部が小さく、接合部の径が小さいものである。高さのある脚部が大きく開きながら内彎する。Ⅱ－2期のものから低平なものが目立つようになり、Ⅱ－3期には脚部そのものが小さくなっている。

器台B　脚部が直線的、もしくは裾が外反するもので関東地方の在地化した小型器である。量的には最も多く一般的で、本遺跡においても大多数が本類型のものである。Ⅱ期全体で見られるが、本遺跡ではⅡ－3期のものが最も多い。大宮台地、児玉地域などでは、古墳時代中期初頭のものも見受けられるが、本遺跡ではⅡ期の中に納まる。

型式論的な変化の基本的な方向性はA類と同様である。器受部はⅡ－2期以降になると器肉が厚いものが多くなるようである。脚部は直線的なものが大部分だが、Ⅱ－3期には端部が更に外側に開くものが少数ながら認められる。器面の調整もヘラ磨きが主体であるが、Ⅱ－3期にはヘラナデや刷毛目のものも多くなり、一部でヘラケズリのものも見られる。

器台C　器受部が埦形になるものである。量的には少ない。本来Ⅱ期全体で見られるものと思われるが、本遺跡ではⅡ－1期のものは認められず、Ⅱ－3期のものが最も多い。関東地方で古くから見られる形態の一つだが、やはり量的には少なく、本遺跡の様相もそれを反映している。大宮台地や児玉地域なども同様の様相を呈している。

型式論的な変化の基本的な方向性はA類と同様である。器受部の大きさはあまり変化がないが、Ⅱ－2期が脚部の径が大きいことから相対的にやや小さく、Ⅱ－3期には脚部の径が小さくなることから相対的に大きく見える。Ⅱ－3期のものは形態が様々である。脚部は直線的なものが大部分だが、B類同様に、Ⅱ－3期には端部が更に外側に開くものが少数ながら認められる。器面の調整もヘラ磨きが主体であるが、Ⅱ－3期にはヘラナデのものも多くなる。222－27は器受部がきれいな椀状であるのに脚部は低平で基部が太く、端部が更に外側に広げられる。新旧の要素が交錯する個体といえる。

器台D　口縁部が外側に水平に延びるもので、本遺跡ではⅡ－2期のみにしか認められない。笹森紀巳子氏は、この類型が、南関東地方では前野町式から五領Ⅰ式までの古い段階のみに認められるとしており（笹森1989）、本遺跡も同様にこの段階で収束するものと考えられる。

器台E　房総地方の影響を受けたもので、五領式の新しい時期から和泉式の最古段階に見られることが知られている。本遺跡ではⅡ－3期のみに認められる。ナデ調整で、器肉が厚い。脚部は台付甕と同様のものである。

器台F　本地域のものではなく、北陸地方西部・北近畿などの日本海側が淵源と考えられるものである。本遺跡ではⅡ－2期の218号住居跡・234号住居跡に限って出土している。県内ではわずかに岩槻市平林寺遺跡第11号住居跡の例が知られるのみである。本遺跡とほぼ同時期と考えられる。

装飾器台　北陸系装飾器台の系譜を引くものである。大きく外反する器受部、涙滴形、もしくは円形の透穴、鍔という特徴的な器形である。Ⅱ期全体で認められ、『反町遺跡Ⅰ』の報告でも、2点、

出土している。県内では、大多数が単品で出土する場合がほとんどだが、坂戸市中耕遺跡（杉崎1993）や児玉町野中遺跡（整理中）でも集中して出土しており注目されよう。本遺跡例はいずれも破片で、型式論的検討に耐えるものではないが、現状では高坏A類の脚部と同様の変化を示すと考えられる。

甕　壺の胴部下半のように体部が内彎するA類と、直線的なB類がある。両者とも底部が突出することから、成形過程が壺と同一であることが分かる。Ⅱ期全体で認められⅢ期にまで継続する。

甕A　体部が内彎するもので、いずれも単孔である。Ⅱ－1期からⅢ（古）期まで継続して認められる。型式論的な変化は明瞭でないが、時期が下るにつれて器高の割合が高くなる傾向が認められる。器面の調整は刷毛目、もしくはヘラナデを基本としている。Ⅱ－1・2期のものは単口縁で、やや直線的である。Ⅱ－3期のものは複合口縁で、下半の彎曲が強く、全体に丸い印象を受ける。Ⅲ（古）期のものは、再び単口縁で直線的になる。

甕B　体部が直線的なもので、Ⅱ－2期には単孔と多孔があるが、Ⅱ－1・3期は単孔である。Ⅱ期全体で見られ、Ⅲ（古）期にはA類に収斂されるようである。型式論的な変化はA類と同様だが、こちらの方が明瞭である。器面の調整は刷毛目、もしくはヘラナデを基本とするが、内面にヘラ磨きが施されるものがある（190－22・179－1・196－38・196－39）。Ⅱ－1期のものは単口縁で、やや直線的である。Ⅱ－2期のものはAとほぼ同様の単口縁のものと、複合口縁の大型のものが認められる。大型のものは多孔であり、他地域系統の可能性がある。この時期のみにしか認められない。Ⅱ－3期のものはごく幅の狭い複合口縁と単口縁のものがある。逆台形に近い形で深くなっている。

ミニチュア　工具を使って成形するA類と手づくねのB類がある。Ⅱ期全体で認められ、Ⅲ期に継続している。

ミニチュアA　埦形を呈する。口縁部のあるものとないものがある。Ⅱ期全体で認められる。型式論的な変化は不明瞭だが、Ⅱ－3期のものは若干深くなるようである。

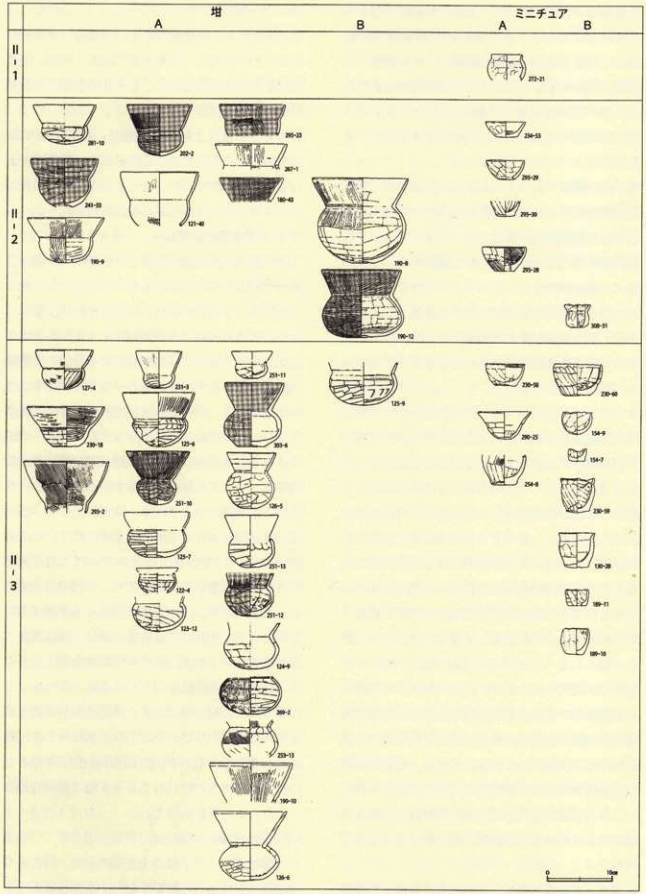
ミニチュアB　全体に不整形で、埦形を呈する。口縁部のあるものとないものがある。指ナデによって仕上げられている。Ⅱ－2・3期で認められ、Ⅱ－3期のものは若干深くなるようである。

（2）古式土師器の受容

反町遺跡の古式土師器は、この地域の弥生時代後期の土器が吉ケ谷式であることから、全く新たな土器群として受容されている。しかし、それは新しい集団の入植による強制的な入れ替えというような状況ではなく、吉ケ谷式の土器作りの影響が随所に窺えるものである。一つは吉ケ谷系土器の存在である。前項で吉田が述べるように、縄文施文の吉ケ谷式的な器形を持つ土器群がⅡ－1期には一定程度認められる。また、甕類の基礎的な調整にヘラケズリが多用されている。土器の内外面には化粧掛けのように薄く粘土が塗られ、特に内面は執拗なまでに平滑に仕上げられている。化粧掛けのような仕上げの粘土の塗布は大宮台地や児玉地域の土器でも見受けられ、一般的な手法である可能性が高い。一方で、内面の平滑化は大宮台地などではそれほど顕著ではない。逆に岩鼻式、吉ケ谷式の壺・甕は内面が非常に平滑に仕上げられており、その伝統を引くものと考えられる。このように、反町遺跡の古式土師器は吉ケ谷式土器を作成していた集団が新たに取り入れたものと評価される。台付甕の169号住居跡出土資料のように部分的な導入が行われ、Ⅱ－1期に爆発的に取り入れられた様相が窺える。

（3）出土土器の時期区分

『反町遺跡Ⅰ』では出土土器群を古・新の二つの段階に分け、その概要を記し、本報告によってそれらは再構成する必要が生じた。以下ではそれ



第581図　古墳時代の土器変遷図（9）

らの資料についても再度位置付けを行いながら、住居跡出土資料をもとにⅡ期を３段階に分けた。

Ⅱ－１期　本遺跡で古式土師器が本格的に導入される時期である。第147・148・193・283号住居跡出土資料に代表される。反町Ａ区２号溝、Ｂ区48号溝跡の一部もこの時期のものと考えられる。東海系や畿内系土器の忠実な模倣形態が見られる。二重口縁壺Ａ、台付甕Ａ～Ｃ、甕Ａ～Ｃ、小型壺Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、高坏Ｂ・Ｅ、器台Ａ、鉢Ａ、甑Ａ・Ｂ、装飾器台、ミニチュアによって構成される。壺・台付甕・小型壺は口縁部が長く、頸部の屈曲が強い球形胴を呈している。周辺遺跡では、代正寺遺跡10号住居跡、下道添遺跡ＳＺ４、五領遺跡Ａ区13号住居跡が該当しよう。

Ⅱ－２期　本遺跡で古墳時代前期の集落が本格的に展開を始める時期である。第180・190・214・234号住居跡出土資料に代表される。反町Ｂ区36号溝、同48号溝跡の一部もこの時期のものと考えられる。二重口縁壺Ａ・Ｂ、複合口縁壺Ａ・Ｂ・Ｄ、単口縁壺Ａ、台付甕Ａ～Ｄ、甕Ａ～Ｅ、小型壺Ａ～Ｅ、高坏Ａ～Ｃ、器台Ａ～Ｄ・Ｆ、鉢Ａ・Ｂ・Ｆ、台付鉢、坩Ａ・Ｂ、甑Ａ・Ｂ、装飾器台、ミニチュアＡ・Ｂによって構成される。壺・台付甕・小型壺は口縁部がやや長く、頸部の屈曲が強いやや長めの球形胴を呈している。この時期から坩が明瞭に組成に加わる。また、不明瞭だが、この時期から組成に下加南型高坏が先駆的に加わるものと考えられる。周辺遺跡では代正寺遺跡61号住居跡、五領遺跡Ｂ区46号住居跡が該当しよう。

Ⅱ－３期　本遺跡で最も多くの古墳時代前期の住居跡が展開する時期である。第196・245・303号住居跡出土資料に代表される。反町Ｂ区36号溝の一部もこの時期のものと考えられる。二重口縁壺Ａ・Ｂ、複合口縁壺Ａ～Ｃ、単口縁壺Ａ・Ｂ、台付甕Ａ～Ｃ、甕Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ、小型壺Ａ～Ｅ、高坏Ａ～Ｃ、器台Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ、鉢Ａ、台付鉢、坩Ａ・Ｂ、甑Ａ・Ｂ、装飾器台、ミニチュアＡ・Ｂによって構成される。壺・台付甕・小型壺は口縁部がやや長いものと短いものがあり、頸部の屈曲が強い長めの球形胴を呈している。頸部の内外面に粘土が貼付され、肥厚しているものが多い。組成に下加南型高坏が定着するのが指標である。周辺遺跡では代正寺遺跡24号住居跡、五領遺跡Ｂ区Ｃ－６・Ｂ区47号住居跡が該当しよう。なお、Ⅱ－２、Ⅱ－３期については更に細分できる可能性もあるが、ここでは、性急に区分せず、反町Ｃ区、４・５次の整理を待って再度検討することにしたい。本報告でⅢ－１期の指標とした和泉型高坏と本期の指標である

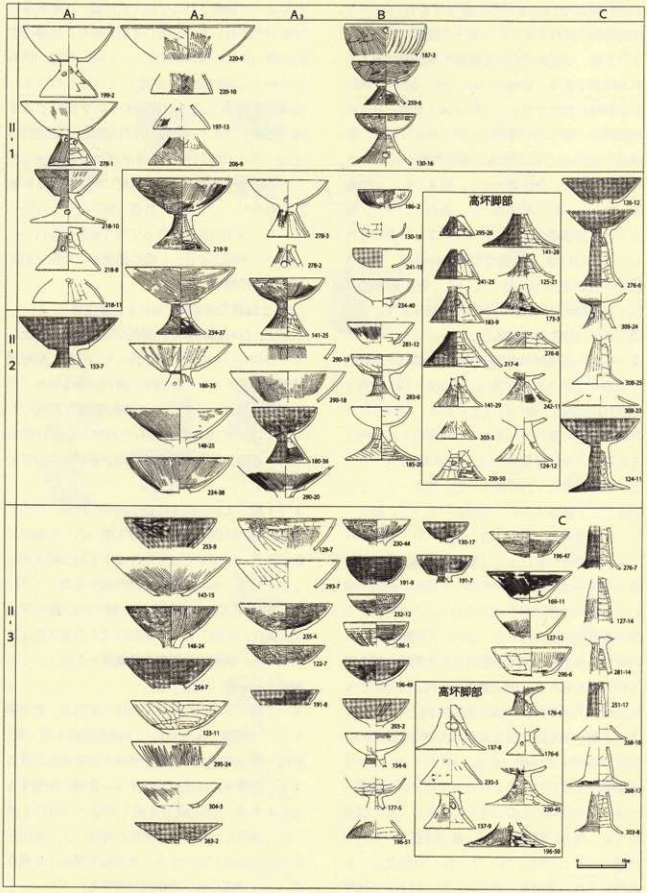
（４）土器群の地域間における位置付け

以上、反町遺跡第３次調査の住居跡から出土した土器について時期区分を行った。今後、反町遺跡第１・２・４・５次調査の報告があるため、再検討されるが、大枠としての時期区分を行った。ここでは、県内の他遺跡の土器群との並行関係、東海、北陸、畿内など他地域の土器群との並行関係を示す。

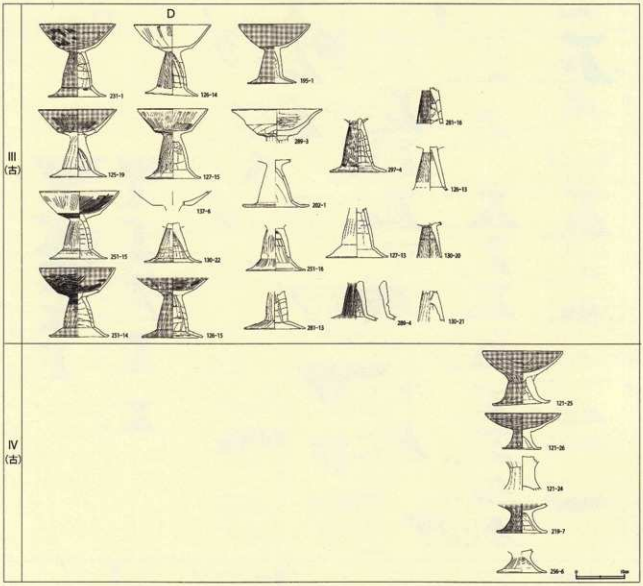
Ⅱ－１期　大宮台地では書上編年２段階、蓮田市ささら遺跡新段階、前原遺跡１期（古）の資料が該当する。南関東では比田井編年Ⅱ期に相当すると思われる。赤塚次郎氏の廻間編年Ⅲ期２・３段階、田嶋明人氏の漆町８群、関川氏の纏向Ⅳ式、寺沢薫氏の布留Ⅰ式、米田敏行氏の布留式期Ⅰに相当する。新潟協会編年北武蔵Ⅲ～Ⅳ期、シンポ編年７～８期に相当する。

Ⅱ－２期　下加南型高坏が組成に加わる。書上編年２～３段階、大宮台地では前原遺跡１期（新）段階、児玉地域では川越田遺跡古段階資料が該当する。南関東では比田井編年Ⅱ～Ⅲ期に相当すると思われる。廻間編年Ⅲ期４段階～松河戸Ⅰ式（古）、漆町９～10群、寺沢氏の布留２式、米田氏の布留式期Ⅱに相当する。新潟協会編年北武蔵Ⅳ期、シンポ編年８～９期に相当する。

Ⅱ－３期　下加南型高坏が定着、展開する。書上



第582図　古墳時代の土器変遷図（10）

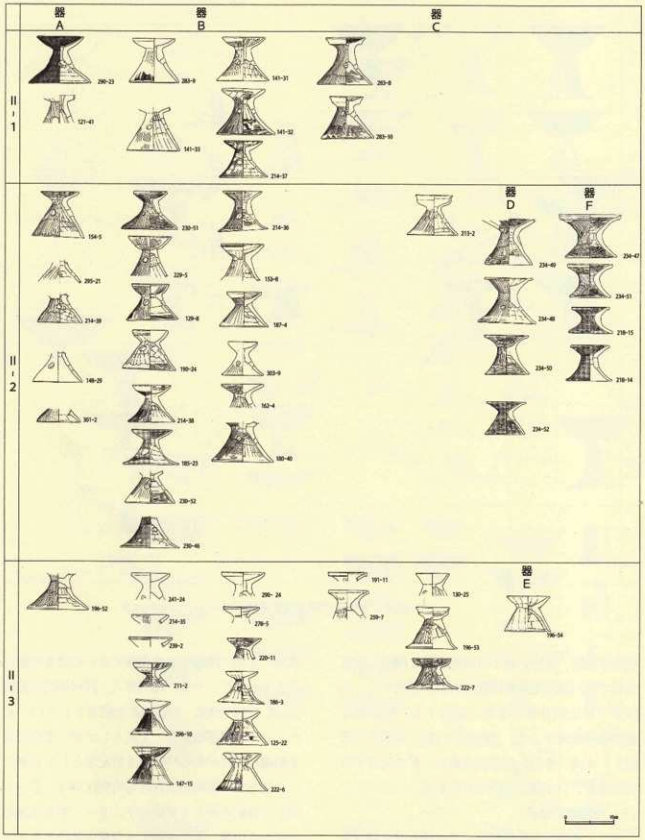


第583図　古墳時代の土器変遷図（11）

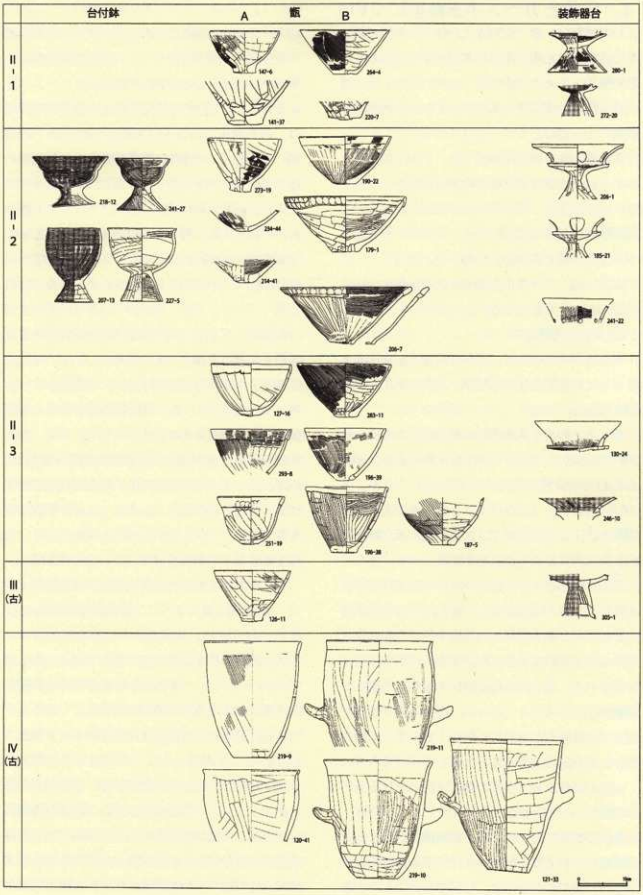
編年３段階、大宮台地では前原遺跡２段階、児玉地域では川越田遺跡新段階の資料が該当する。南関東では比田井編年Ⅲ期に相当すると思われる。廻間編年松河戸Ⅰ式、漆町10・11群、寺沢氏の布留３・４式、米田氏の布留式期Ⅲ・Ⅳに相当する。新潟協会シンポ編年10期に相当する。

（５）土器群の年代

現在土器群の実年代については様々な立場がある。ＡＭＳの成果や年輪年代法の成果により、本遺跡のⅡ期の開始年代も大きくさかのぼる可能性があるが、ここでは、森岡秀人・西村歩氏の見解（森岡、西村2006）を取り３世紀末としたい。また、Ⅱ－３期を布留３・４式としたが、定点となる船橋Ｏ１にかかる時期を４世紀末としておきたい。従って、本報告における時期区分は、Ⅱ－１期を３世紀末から４世紀前半、Ⅱ－２期を４世紀前半から中葉、Ⅱ－３期を４世紀中葉から末とする。



第584図　古墳時代の土器変遷図（12）



第585図　古墳時代の土器変遷図（13）

4．玉作とガラス小玉鋳型について

反町遺跡は、第２次調査において、全国で初となる古墳時代前期の水晶を素材とする勾玉の工房跡が検出されたことが特筆される。また、緑色凝灰岩を素材とする管玉も製作しており、古墳時代前期の玉作遺跡としても注目される。

今回報告する第３次調査では、それに加えガラス小玉鋳型の破片が住居跡内から検出された。ガラス小玉鋳型は、埼玉県内では初出となるもので、反町遺跡は勾玉や管玉に加え、ガラス小玉も製作する玉作遺跡であることが明らかとなった。

ここでは、ガラス小玉鋳型を含む玉作について検討していくこととする。

（1）玉作工房跡について

第３次調査において、玉作に関連する遺物がまとまった点数出土する遺構は、北側に集中して検出された。

最も多くの玉作関連遺物が検出されたのは、第268号住居跡で、剥片や砕片を合わせると、2000点を超える点数が出土した。次に多いのが、第295号住居跡で、128点が出土した。他の玉作関連遺物が出土した住居跡で、20点を超える点数を検出したものはなかった（第591図）。

玉作工房跡とするには、いくつかの条件が必要とされている（寺村1966）。第１に、竪穴住居跡などの工房となる空間的な範囲を持つ施設の存在。第２に、工房内に玉作に関連する工作用の施設が敷設される。第３に、施設内から製作に必要な工具類が出土すること。第４に、玉作の製作工程が復元できる未製品と共に、製作工程で生じる剥片類や、原石が出土すること。などが挙げられる。

以上の条件から、今回の調査区内における玉作工房跡について、検証していく。

今回の調査において、玉作関連遺物が出土した住居跡については、第１の条件である空間的な範囲を持つ施設については、住居であることから条件を満たしているといえる。しかし、工房跡の前提条件である、第４の条件からいえば、未製品類や剥片類が一定量出土している第268号住居跡と、第295号住居跡のみが対象となる。

そのうち、第295号住居跡出土の玉作関連遺物は、緑色凝灰岩の管玉の未製品や剥片類（第587図）だが、その点数は128点と少ない。住居跡の西半部のみが調査され、東半部については不明であるが、西壁よりに遺物が検出されている状況から、点数が大幅に増えるとは考えにくい。しかしながら多くの遺物が床面直上から出土しており（第339図）、東半部に玉作の中心があった可能性も残っている。だが、現時点では第４の条件を充分に満たしていると言えず、現状では第295号住居跡を工房跡と確定するのは難しい。

次に、第268号住居跡について検討していく。第268号住居跡からは、緑色凝灰岩の管玉の未製品や、剥片類が多量に出土している。また、水晶についても、未製品１点、微細な剥片・砕片108点が出土している（第587図）。緑色凝灰岩の管玉については、原石は出土しなかったが、製作工程を復元することのできる未製品が出土している。以上から第４の条件を満たしていると言える。

第２の条件である、工房内の工作用施設であるが、第292図に見るように、第268号住居跡からは、炉跡や柱穴など、施設自体が検出されていない。では、遺物の出土状況からはどうであろうか。第294図からみると、遺物の分布は住居跡北西隅と、南半部のやや東寄りに遺物が集中していることがわかる。遺物は、床面直上からその多くが検出されている。北西隅からは、未製品が主に出土し、南側の遺物集中では、未製品の他、剥片類が多量に出土している（第293・294図）。南側の遺物出土状況は、古墳時代前期の玉作工房跡である前原遺跡第２号住居跡の出土状況とよく似ている（宮井2011）。今回、工作用ピットなどは検出されなかったが、前原遺跡第２号住居跡の状況から類推

すれば、住居跡の南東側で管玉を製作していた可能性は高いと考えられる。北西隅の遺物については、未製品がほとんどであることから、まとめて置いていた可能性も考えられる。

第3の条件である工具類については、砂岩の砥石が1点出土したのみであった。

以上から、工作用施設の存在や、工具類については条件を満たしていると言えないが、製作工程が復元できること、製作時に発生する剥片・砕片類が多量に検出されたこと、出土分布から製作場所が類推できることなどから、第268号住居跡が緑色凝灰岩の管玉の玉作工房であった可能性は高いと考えられる。

また、第268号住居跡を中心として、隣接する住居跡である、第273・295・308号住居跡や、第48・79号溝跡から緑色凝灰岩の管玉の未製品や、剥片・砕片が検出されている（第591図）。この状況は、第2次調査で検出された工房跡である第48号住居跡周辺の住居跡内や溝跡内の玉作関連遺物の出土状況にも見られ、前原遺跡においても同様の状況であった。これは、製作時に発生した遺物を、周辺に廃棄していると考えられ、今回もそれと同様とすれば、第295号住居跡の玉作関連遺物も、廃棄された遺物の可能性も考えられる。

（2）管玉の製作工程について（第586図）

今回の調査においては、第2次調査で検出された水晶の勾玉の製作工程が復元できる遺物は検出することはできなかった。

しかし、工房跡の可能性の高い第268号住居跡においては、緑色凝灰岩の管玉の製作工程をほぼ復元することができた。ここでは、第268号住居跡を中心とし、周辺の遺構の遺物も一部含め、管玉の製作工程について検討していくこととする。

管玉については、第127号住居跡から長さ6cmに及ぶ管玉が出土しているが、この大型の管玉の未製品については第268号住居跡や周辺からは検出されておらず、今回の製作工程は小型の管玉を対象とするものである。

管玉の製作工程については、大きく4つの工程に分類した。荒割工程、形割工程、調整工程、研磨・穿孔工程である。各工程については、細分できる可能性もあるが、ここでは細分せず考えていくこととした。

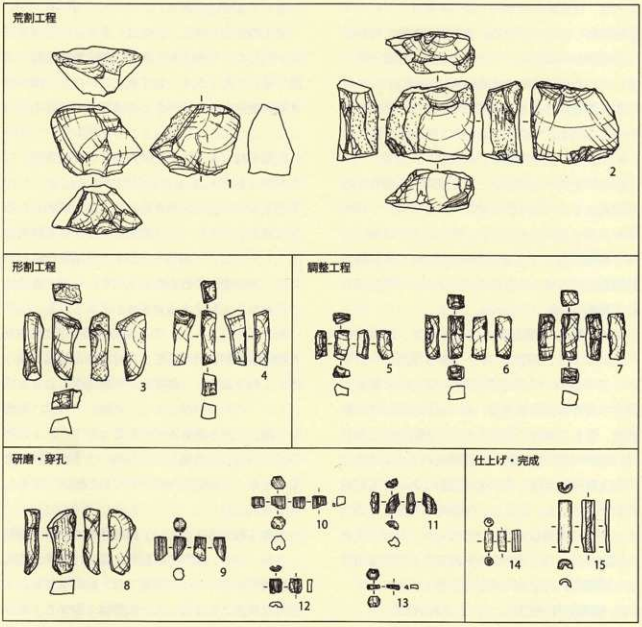
荒割工程（1・2）は、採集した原石を荒く打ち割り、板状に加工する工程である。1・2は、荒割工程中の破片と考えられる。住居跡内から原石は検出されておらず、調査区全体からも原石は出土していない。原石を分割する荒割工程については、別の場所で行われる工程や、石材の採集地で行われる工程である可能性が考えられる。

形割工程（3・4）は、荒割工程で作り出された板状の素材を分割して、角柱状の未製品を作り出す工程である。分割された剥離面がそのまま残存しているのが特徴である。剥離の方向は、側面から横長に割り取られていることが多い。4の剥離面の打点の反対側にも、打点のような痕跡があることから、割り取り時の当て具の痕跡であると考えられる。

調整工程（5～7）は、角柱体となった未製品の各面に細かい調整や、敲打を加えて形状を整える段階である。今回の調査では、敲打を加えた未製品は検出されなかった。調整は1面から4面以上に加えられるが、加工の途中段階の遺物が多いため、全面に調整を加えるか、加工が必要な面のみ調整を加えるかは明確ではない。

研磨・穿孔工程（8～13）については、研磨と穿孔の工程を1つにまとめている。研磨し、仕上げる一連の作業工程の中に、穿孔作業が入るものであることから、同一工程としたものである。

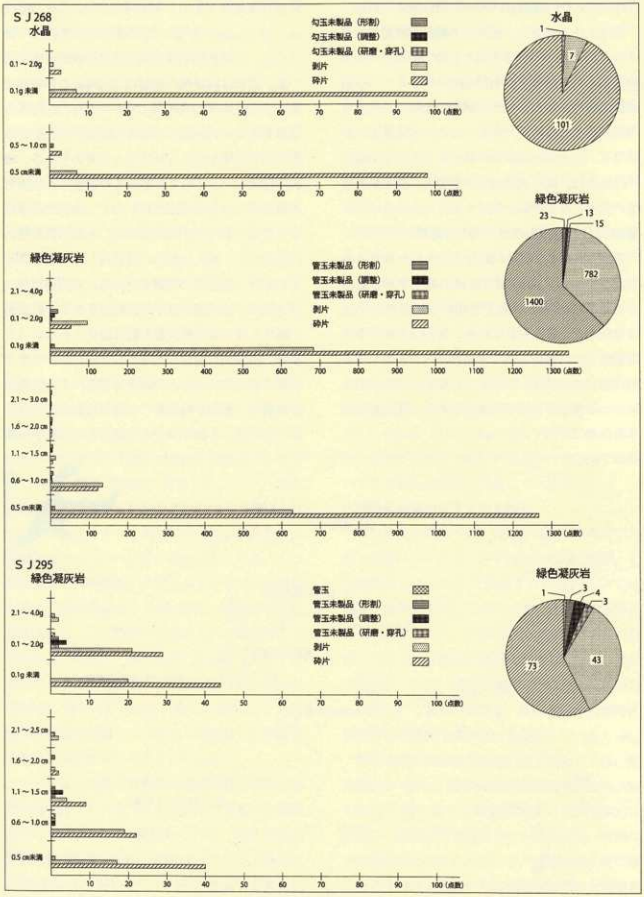
研磨は、まず角柱体のまま6面すべてに粗い研磨を加える工程（8）を行う。次にやや目の細かい砥石を使用して、角柱体の角部分をすべて磨り潰す工程（9）を行い、角柱体から8角柱以上の多角柱状に研磨する。これは、より円筒形に近い



第586図　管玉製作工程

形状に近づける作業と考えられる。多角柱状に研磨が終了する段階で、穿孔の工程（10～13）を行う。穿孔は15に見られるように、反転して行う両面穿孔である。この穿孔の工程においては、10などに見られるように失敗することが多かったようである。そのため、円筒状に仕上げる前に穿孔して無駄を省いていたと考えられる。また、この工程については、13のように短く薄く割られた未製品が出土することが特徴的である。これらの形状の未製品は、第２次調査や前原遺跡でも出土しており、失敗部分を打ち割って、再度穿孔作業を行っていた可能性も考えられる。穿孔が成功した後、仕上げの細かい研磨を行い完成させている（14・15）。

以上が、管玉の製作工程である。これらの工程については、第２次調査で出土した管玉の製作工程や、前原遺跡の管玉の製作工程と大きな差は認められない。細かい部分については、詳細な検討が必要となってくる。第２次調査の報告を待ち、比較検討を行っていきたいと考えている。



第587図　第268・295号住居跡出土玉作関連遺物数量比

（3）ガラス小玉鋳型について（第588図～590図）

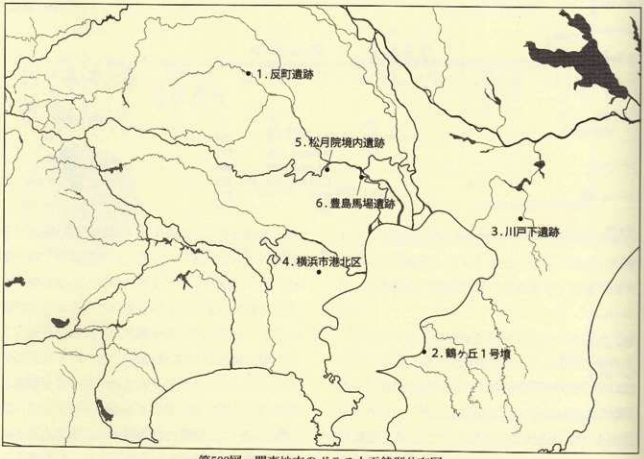
ガラス小玉鋳型は、板状の土製品の表面に、多くの小孔が並んで開けられるものである。今回の調査において、第206号住居跡内からガラス小玉鋳型の破片が検出された。鋳型の検出は、埼玉県では初出となるものである。また、関東地方においても、出土例は数少ない状況である（第588図）。

ここでは、反町遺跡出土の鋳型と、関東地方出土の類例とを比較し、検討を加えていきたい。

第206号住居跡出土のガラス小玉鋳型

第589図１は、今回の調査で出土したガラス小玉鋳型である。第206号住居跡の覆土中から検出されたものである。出土遺物から住居の時期は、４世紀中葉と考えられている。鋳型は小破片が２点検出され、接合されて１点となったものである。型孔部分の中には、まだ土などが詰まった孔もあるが、今後分析を行う可能性も考え、孔内を洗浄する作業は行っていない。

縁辺は割れており、残存する長さ3.5㎝、幅4.4㎝、厚さ1.2㎝である。孔は横方向に連続して開けられ、孔の上端が横方向で連結し溝状となっている。これは同時期の鋳型には見られない特徴である。型孔の開口部の径は0.4～0.5㎝、底面部の径は約0.4㎝である。表面が風化しているため、開口部分がやや広くなっていると考えられる。軸孔の径は0.1～0.15㎝である。孔が詰まった状態で、Ｘ線写真と合わせ実測したもので、軸孔の深さについては、多くが不明であるが、Ｘ線写真や割れ口部分から、軸孔は裏面には貫通していないことがわかる。型孔は、痕跡も含めると33個が器面に残されていた。裏面は平らに整形されるが、器面が風化しているため、整形痕は認められなかった。また、実測図の遺物の上部から下部にかけて厚さが厚くなっていくことが観察できる。また、器面の色調は、表面が褐色なのに対し裏面は灰褐色となっている。Ｘ線写真でも確認したが、鋳型の断



第588図　関東地方のガラス小玉鋳型分布図

面に貼り合わせた痕跡はなく、火を強く受けて裏面の色調が変化したものと考えられる。

関東地方から出土したガラス小玉鋳型

ガラス小玉鋳型が認識されたのは、全国で見ても1990年代以降である。関東では1993年調査の豊島馬場遺跡が初めてガラス小玉鋳型として認識された出土例である。その後、1979年調査の川戸下遺跡の用途不明の土製品が、ガラス小玉鋳型と再確認されるなどし、現在報告されている遺跡は、反町遺跡も含めて６遺跡と数少ない状況である（第588図）。

第589図２～17は、関東地方で出土したガラス小玉鋳型である。千葉県では２遺跡から鋳型が出土している。２・３は、木更津市鶴ヶ岡１号墳から出土したガラス小玉鋳型である（酒巻1995）。１号墳は、古墳時代前期の４世紀中葉前後の築造とされている。鋳型は、墳丘内や墳丘を破壊する近世の溝跡から出土したものである。型孔の径は0.38～0.41cm、深さは0.3～0.35cm、軸孔は0.1～0.15cmである。軸孔は裏面に貫通していない。また、軸孔内に、断面が五角形の芯材の残存が確認されている。縁辺はすべて割れ口である。型孔内には、微細なガラス小片の付着が認められている。４は四街道市川戸下遺跡から出土したガラス小玉鋳型である（新井他1982、中島1994）。鋳型は２号住居跡内から、９片に割れて検出され、接合したものである。縁辺の一部が残存している。関東では最大のもので、孔も308が残存している。型孔の径0.4cm、深さ0.35～0.4cm、軸孔の径0.1cmである。軸孔は裏面に貫通していない。時期は、古墳時代前期の４世紀前半と考えられている。

５・６は、神奈川県横浜市港北区新吉田東の畑地から表採されたガラス小玉鋳型である（古屋他2010）。縁辺はすべて破損している。型孔は開口部0.34cm、底面0.25cm、深さ0.4cmである。軸孔は上端0.15cm、下端0.1cmで、軸孔は裏面まで貫通している。表採のため時期は不明である。

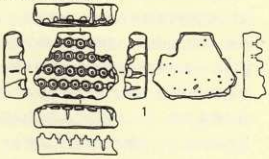
東京都では２遺跡が報告されている。７は板橋区松月院境内遺跡から出土したガラス小玉鋳型である（隅田他1998）。遺構外から検出されている。縁辺の一部が残存し、緩やかな曲線を持っている。型孔の径0.35cm、軸孔の径0.1cmである。軸孔は裏面に貫通している。古墳時代前期の住居跡も検出されているが、中期の住居跡も検出されており、詳細な時期は不明である。８～17は北区豊島馬場遺跡から出土したガラス小玉鋳型である。８～15は周溝持建物跡の周溝部分から検出され、８・９がＳＨ01、10がＳＨ03、11～13がＳＨ18、14・15がＳＨ64である。16・17は遺構外から検出された。鋳型が出土した周溝持建物跡の時期は、古墳時代前期の４世紀前半である。型孔は８・９・11・17が0.35cm、10・16が0.3cm、12・13が0.4cm、14・15が0.35～0.4cmである。深さは８が0.2cm、９が0.4cm、10が0.3～0.35cm、11が0.1cm、12が0.15cm、13が0.2～0.3cm、14が0.35cm、15・17が0.25cm、16が0.2～0.25cmである。軸孔の径はすべて0.1cmである。いずれも軸孔は裏面に貫通していない。

古墳時代前期のガラス小玉鋳型

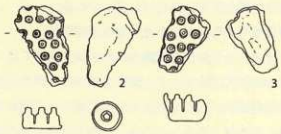
関東の出土例のうち、時期が特定できるガラス小玉鋳型については、いずれも古墳時代前期、４世紀代のものである。共通する特徴については、型孔が並列して開けられていること、第555図４に見られるように、全体の形状が方形であると推定されること。軸孔が裏面に貫通しないことがあげられる。また、型孔や軸孔の径に大きな差は見られない。これらの特徴は、反町遺跡の古墳時代前期の住居跡出土の鋳型とも共通している。

他の地域の古墳時代前期の出土例としては、第590図18～22の、福岡県福岡市西新町遺跡例が知られるのみである（重藤他2000・吉田他2003）。鋳型は、住居跡や土壙などから検出され、時期は４世紀前葉と考えられている。遺跡は博多湾に面する弥生時代終末期から古墳時代前期の大規模な集落で、多くの朝鮮半島系土器が出土する遺跡と

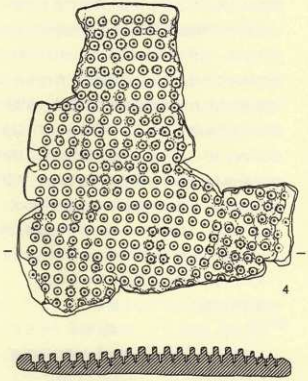
1. 埼玉県東松山市反町遺跡３次



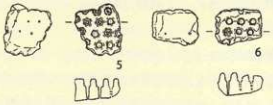
2. 千葉県木更津市鶴ヶ丘１号墳



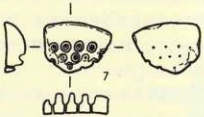
3. 千葉県四街道市川戸下遺跡



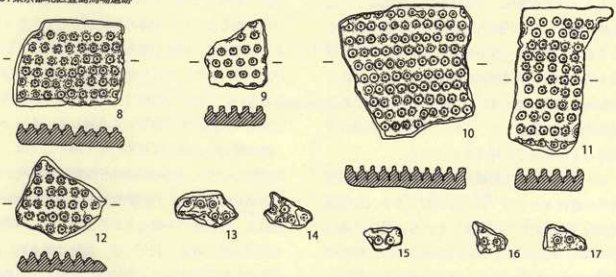
4. 神奈川県横浜市港北区表採資料



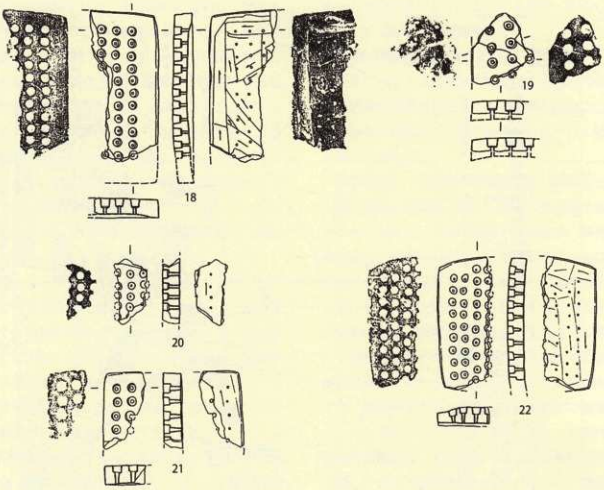
5. 東京都板橋区松月院境内遺跡



6. 東京都北区豊島馬場遺跡



第589図　各遺跡出土のガラス小玉鋳型（1）



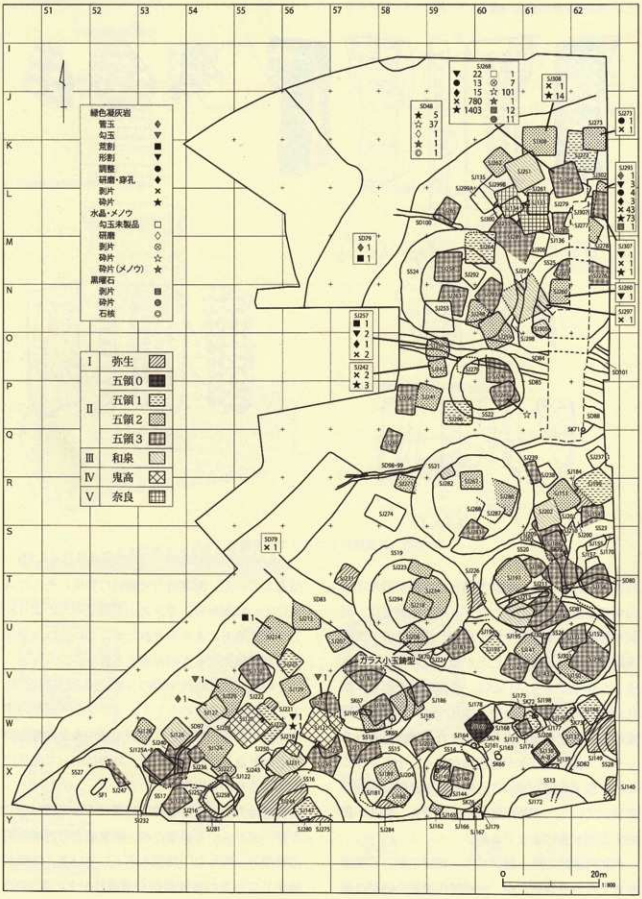
第590図　各遺跡出土のガラス小玉鋳型（2）

して知られている。朝鮮半島との交流が盛んであったこの遺跡から出土したガラス小玉鋳型は、形状や製作技法が朝鮮半島で出土しているガラス小玉鋳型と類似していることが指摘されている。出土した鋳型である18～22は、全体形が方形で、型孔が直線的に開くことや、型孔や軸孔の径など関東地方の例と共通点も多い。また、18に見られるように、鋳型の厚さが縁辺部が薄く、中央が厚くなる特徴も共通している。軸孔については裏面に貫通している。朝鮮半島の出土例でも、軸孔が貫通する例が多いようである。

西新町遺跡の出土例からも、朝鮮半島との関連が考えられる鋳型だが、古墳時代前期の鋳型は現在のところ西新町遺跡以外では、関東地方のみに分布している。関東地方で独自に発生したとは考えにくい状況から、ガラス小玉鋳型がどのようにして関東地方にもたらされたかについては、今後大きな課題になるものと考えられる。

その後、古墳時代中期の５世紀後半以降になると、近畿地方を中心として、ガラス小玉鋳型の出土が見られる。形状も、縁辺が緩やかな曲線を持つものとなり、孔の配列も、外形に沿って弧状に配列するものも出現している。

関東地方では、古墳時代前期にその分布の中心を持つガラス小玉鋳型だが、関東地方の古墳前期の特徴と一致しない鋳型も出土している。時期が確定していない表採資料や遺構外出土の第589図５～７については、他の出土例とは違い軸孔が貫



第591図　玉作関連遺物の出土分布と住居跡時期別分布図

通しているのが特徴的である。また、7は縁辺が緩やかな曲線を持ち、その形状に合わせて型孔も開けられているように観察される。5・6の軸孔が貫通する鋳型については、西新町遺跡の例からすれば、古墳時代前期に存在する可能性もある。また、7の例については、近畿地方の出土例からすると、時期が新しくなる可能性も考えられる。関東地方でガラス小玉が鋳型によって前期以降も作られていたか、または古墳時代前期に関東においては、鋳型の形状がバラエティに富んでいたとするかについては、今後資料が増加することによって明らかになるものと考えられる。

鋳型によって作られたガラス小玉について

ガラス小玉は、吹きガラス管を割ってつくる管切や、金属の棒にガラスを巻き付けてつくる方法などがある。これらは、ガラスを素材から製作する方法である。ガラス小玉鋳型による玉作は、ガラス製品を粉砕し鋳型に充填して製作する、ガラス製品の再利用と言える方法である。

反町遺跡から出土したガラス小玉鋳型の型孔内には、ガラスの破片が残存しており、分析の結果紺色のカリガラス片であることがわかっている。このことからも、出土した鋳型がガラス小玉の製作に使用されていたことは確実である。しかしながら、今回の調査区内からはガラス小玉は検出されておらず、現在整理中である2次調査においても、鋳型によって製作されたガラス小玉は検出されていない。

反町遺跡において、鋳型によるガラス小玉がどの程度生産されていたか、またどこに供給されていたかは不明である。川戸下遺跡例に見られるように、鋳型によっては1度に500個以上を製作できることから、大量生産されていた可能性は高い。

しかし、生産するには鋳型に充填する破片のもととなるガラス製品を手に入れることが前提条件となる。ガラスは舶載品のみが流通していたと考えられる古墳時代前期にあって、入手が容易であったのかなど、関東地方にだけ鋳型によるガラス小玉の玉作が集中していることも含め、考えていかなくてはならない課題である。

(4) 玉作関連遺物の分布と時期 (第591図)

最後に、第3次調査区内における古墳時代前期の住居跡や溝跡から出土した玉作関連遺物について、分布の状況と、玉作の製作時期について簡単に触れておきたい。

第591図は、住居跡の時期変遷図と遺構出土の玉作の製品、未製品、剥片、破片の分布図である。

これによると、玉作に関連する遺物は、調査区の北東と、調査区の南西に分布が大きく2つに分かれており、中央部分からはまったく遺物が出土していない。出土量からすると、北東の分布域が圧倒的に多く、南西の分布域の出土量は、各遺構に1点がほとんどのうえ、製品が主体的で未製品は数点検出されたのみである。このことから南西では、遺物が出土した遺構が、直接玉作に関連していたと考えにくい状況である。また、北東の分布域の東側には、玉作工房である第48号住居跡が位置しており、反町遺跡の玉作の中心が、調査区の北側の第49号溝跡周辺に集中していたと考えられる。水晶については、第268号住居跡から出土した、研磨段階の水晶の勾玉の破片以外は、北東側で微細な剥片や破片が出土するのみであることから、水晶を使用する玉作は第3次調査区内では行われていないと考えられる。

次に、玉作の時期について考えてみたい。玉作の中心と考えられる北東の分布域でみると、大きく2時期に分かれている。第268・307号住居跡のⅡ－3期、第242・257・273・295・308号住居跡などのⅡ－2期である。ガラス小玉鋳型を出土した第206号住居跡は、Ⅱ－2期であった。以上のことから、今回の調査区においては、玉作は4世紀前半から中葉に相当するⅡ－2期から、4世紀中葉から末に相当するⅡ－3期にかけておこなわれていたと考えられる。

引用参考文献

青木和明・千野　浩　1987『長野吉田高校グラウンド遺跡』長野市教育委員会　長野市遺跡調査会

赤塚次郎　1990『獅岡遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター

新井和之他　1982「川戸下遺跡」『北総線』東京電力北総線遺跡調査会

石川日出志　2006「弥生時代中期後半の関東地方西武城」「埼玉の弥生時代」六一書房

石坂俊郎　2005「五領遺跡出土の今昔-埼玉県立歴史資料館の紹介を兼ねて-」『研究紀要』第27号埼玉県立歴史資料館

上田健太郎　2010「弥生時代の取水堰について」『先史学・考古学論究』V龍田考古会

大木紳一郎　2006「岩鼻式と樽式土器」「埼玉の弥生時代」六一書房

大阪市文化財センター　2006『古式土師器の年代学』

大谷　徹・宅間清公　2006『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第323集

書上元博　1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第139集

柿沼幹夫・宅間清公・的野善行　2005「岩鼻遺跡（第２次）出土の「岩鼻式」土器について『紀要』30埼玉県立博物館

柿沼幹夫　2006「岩鼻式土器について」『土曜考古』第30号　土曜考古学会

柿沼幹夫　2007「２土器研究　後期土器編年一県北部・西部地域」「埼玉の弥生時代」六一書房

柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫　2008「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ」「国士舘考古学」第４号国士舘大学考古学会

柿沼幹夫　2009「北武蔵中央部の後期土器」「南関東の弥生土器２」考古学リーダー16　六一書房

柿沼幹夫・宮島秀夫　2009「岩鼻式から吉ヶ谷式へ　その２」「埼玉考古」45号　埼玉考古学会

金井塚良一「五領遺跡Ｂ区の発掘と五領式土器についてのわれわれの見解」「台地研究」No.19

菊池　真　2009「都幾川下流域の埋没微地形と遺跡立地（予察）」「研究紀要」第22号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒沢　浩　2004「五領遺跡出土土器の再検討に向けて」『明治大学博物館研究報告」第９号

国立奈良文化財研究所　1992『木器集成図録』一近畿原始編一

酒巻忠史　1995「桜ヶ丘遺跡群発掘調査報告書一鶴ヶ岡１号墳・鶴ヶ岡遺跡・俵ヶ谷遺跡」木更津市教育委員会

笹森紀巳子　1989「小型器台形土器に関する覚書」『古代第37号」

重藤輝行他　2000「西新町遺跡Ⅱ」福岡県文化財調査報告書第154集

清水康二　1994「倣製内行花文鏡類の編年一倣製鏡の基礎研究Ⅰ一」『橿原考古学研究所論集」11　吉川弘文館

城倉正祥　2010「生産地分析からみた北武蔵の埴輪生産」「考古学研究」第57巻第２号　考古学研究会

杉崎茂樹　1993「中耕遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第125集

鈴木孝之　1991「代正寺・大西」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第110集

隅田　眞　1998『松月院境内遺跡発掘調査報告書』文化財シリーズ第84集板橋区教育委員会

田嶋明人　1986『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

塚田良道　2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣

寺沢　薫　1986「矢部遺跡」奈良県立橿原考古学研究所

寺村光晴　1966『古代玉作の研究」国学院大学考古学研究報告第三冊

富田和夫・山本　靖　2010『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第369集

中島広顕他　1995年『豊島馬場遺跡」東京都北区埋蔵文化財調査報告16集

日本考古学協会　1993『東日本における古墳出現過程の再検討」

橋本博文　1994「関東北部における古墳出現期の様相」「東日本の古墳の出現」山川出版社

橋本裕行　1986　「受地だいやま式土器について」「奈良地区遺跡群Ⅰ」第２分冊　奈良地区遺跡調査団

比田井克仁　1994「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」「庄内式土器研究Ｖ」

福田聖・富田和夫　2009「反町遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第361集

細井佳浩　1997「宮ノ台式土器と朝光寺原式土器」「考古論叢神奈川」第３集　神奈川県考古学会

松本　完　2003「後期弥生土器形成過程の一様相」「埼玉考古」第38号　埼玉考古学会

水村孝行　1982「桜山窯跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第７集

宮井英一　2010「前原/大沼」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第373集

宮本長二郎　1996「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版

森　浩一　1970「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」橿原考古学研究所編『日本古文化論攷」吉川弘文館

森岡秀人・西村歩　2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題-最新年代化学を基礎として-」『古式土師器の年代学」

吉川國男　2003「下ッ原式土器の提唱」「埼玉考古」第38号　埼玉考古学会

山田光洋・古谷紀之「横浜市港北区新吉田東出土の表採資料-アメリカ式（大根布式）石鏃とガラス小玉錘型について-」『利根川」32

吉田東明他　2003「西新町遺跡Ⅴ」福岡県文化財調査報告書第178集

渡辺　誠　1985「ヨコヅチの考古学・民具学的研究」「考古学雑誌」第70巻３号